

よりよい授業づくりの可能性を求めて

－ 小学校の現場で－

研究開発部 白尾 彰浩

この半年間、長男の通う小学校でパソコン授業のお手伝いをしていた縁から、現場の先生方といろいろなこととお話しする機会がありました。昨年9月には本文で紹介のある電気領域の学習教材を紹介し、その後、6年生の3学期にある「電流のはたらき」という電磁石について学ぶ単元の授業づくりにいっしょに取り組むことになりました。電磁石を作って、磁力の働きをしらべ、それを応用したモーターなどについて勉強する単元です。

授業づくりのためのおつき合いを重ねていく間に、授業参観日とは違うまったく普段の授業や先生方の日常の一端に接し、いろいろなことを感じました。たとえば、先生方が忙しいと言われる実際の様子。確かに忙しいのです。昼間子どもたちがいる間は当然授業があり、職員室には物騒と思えるほど誰もいません。昼の給食指導から帰りのホームルームまで、授業と職員室を走り回っています。休んでいる子どもの家庭への連絡、病院へ行って遅れてきた児童や相談があつて来た親への対応と休む時間はありません。さらに校内・校外の公式な教育研究会、職員会議、学年会議など。

こうした忙しい合間をぬって、電磁石の授業の相談を進めました。この単元は初めてという若い先生、社会科が専門の先生、理科は少し苦手という先生、みなさん、真剣に取り組んでいただきました。電磁石については指導書に説明がありますが、実験の意味や条件が曖昧なところがあり、実際に実験してみるとそれがよくわかりました。

棒磁石や方位磁石のN極、S極が必ずしも固定されていなくて、条件によっては変化すること、また、磁石もいろいろ形や種類によってN極、S極などが一様でないことなどを見つけたり驚きの連続でした。モーターがなぜ回るのか理屈ではわかっている、実際の電気の流れと磁力の関係から回るということを実験し、実感しながら授業準備を進めました。

授業は、2月から3月にかけて15～20時間ぐらいかけて行いました。今年の初めから、6年生3クラスの106名分の教材準備をしながら授業を進めました。材料の買い出しから加工まで、教材準備は夕方から夜9時近くになることもありました。これだけの準備のお陰で、3人の先生方による電磁石の授業は卒業式前に無事に終わりました。

子どもたちは熱心に取り組む、家でも作ってみたいと興味を示した子どももいます。具体的な教材と課題があつたからでしょう。といっても、これは理科のほんの一部ですから、これだけで結果を云々することはできないという思いです。

しかし、私自身を含めて実施した先生は、手ごたえを掴んだといえます。こうした地道な努力の積み重ねによって授業を少しでも変えていくことが、教育改革だという自信がもてました。

それにしても、今回は、小学校一教科の一単元の準備のことです。毎日、毎日他の教科も指導している現場の先生方。現場の先生方が授業づくりに使える時間は限られています。その時間をどのように確保するか、これは難題です。現実に即した形で支援する専門スタッフの必要性を強く感じました。毎日の授業を本当の意味で支援するしくみは、人的にも制度的にもほとんどないというのが現実です。「教育改革」は現場が主役であり、現場が本気で動きやすくするための仕掛け作りです。今回の取り組みを通じて強く感じました。詳しくは、改めてレポートしたいと思います。

能力開発ニュース 62号 (2004,4) より